**降誕節第9主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年2月23日**

**「チャンス到来」**

**イザヤ書40章31節**

**イザ 40:31 主に望みをおく人は新たな力を得／鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。**

**使徒言行録25章13～27節**

 **25:13 数日たって、アグリッパ王とベルニケが、フェストゥスに敬意を表するためにカイサリアに来た。**

 **25:14 彼らが幾日もそこに滞在していたので、フェストゥスはパウロの件を王に持ち出して言った。「ここに、フェリクスが囚人として残していった男がいます。**

 **25:15 わたしがエルサレムに行ったときに、祭司長たちやユダヤ人の長老たちがこの男を訴え出て、有罪の判決を下すように要求したのです。**

 **25:16 わたしは彼らに答えました。『被告が告発されたことについて、原告の面前で弁明する機会も与えられず、引き渡されるのはローマ人の慣習ではない』と。**

 **25:17 それで、彼らが連れ立って当地へ来ましたから、わたしはすぐにその翌日、裁判の席に着き、その男を出廷させるように命令しました。**

 **25:18 告発者たちは立ち上がりましたが、彼について、わたしが予想していたような罪状は何一つ指摘できませんでした。**

 **25:19 パウロと言い争っている問題は、彼ら自身の宗教に関することと、死んでしまったイエスとかいう者のことです。このイエスが生きていると、パウロは主張しているのです。**

 **25:20 わたしは、これらのことの調査の方法が分からなかったので、『エルサレムへ行き、そこでこれらの件に関して裁判を受けたくはないか』と言いました。**

 **25:21 しかしパウロは、皇帝陛下の判決を受けるときまで、ここにとどめておいてほしいと願い出ましたので、皇帝のもとに護送するまで、彼をとどめておくように命令しました。」**

 **25:22 そこで、アグリッパがフェストゥスに、「わたしも、その男の言うことを聞いてみたいと思います」と言うと、フェストゥスは、「明日、お聞きになれます」と言った。**

 **25:23 翌日、アグリッパとベルニケが盛装して到着し、千人隊長たちや町のおもだった人々と共に謁見室に入ると、フェストゥスの命令でパウロが引き出された。**

 **25:24 そこで、フェストゥスは言った。「アグリッパ王、ならびに列席の諸君、この男を御覧なさい。ユダヤ人がこぞってもう生かしておくべきではないと叫び、エルサレムでもこの地でもわたしに訴え出ているのは、この男のことです。**

 **25:25 しかし、彼が死罪に相当するようなことは何もしていないということが、わたしには分かりました。ところが、この者自身が皇帝陛下に上訴したので、護送することに決定しました。**

 **25:26 しかし、この者について確実なことは、何も陛下に書き送ることができません。そこで、諸君の前に、特にアグリッパ王、貴下の前に彼を引き出しました。よく取り調べてから、何か書き送るようにしたいのです。**

 **25:27 囚人を護送するのに、その罪状を示さないのは理に合わないと、わたしには思われるからです。」**

1.

**新しく総督として着任したフェストゥスによって開かれた裁判で、パウロはイエス様の十字架と復活を力強く指し示しました。そしてローマ皇帝に上訴しました。フェストゥスはパウロの上訴を認めて「皇帝に上訴したのだから、皇帝のもとに出頭するように」と答えたのです。このようにしてパウロのローマへの道が開かれたのです、いわばパウロにとってローマ行きのチャンスが到来したのです。では、パウロはすぐにローマに向かって護送される、具体的には27章で記されているようにローマに向かって船出しても不思議ではないのですが、物事はそう簡単には進まないのです。**

**それはフェストゥスがパウロの皇帝への上訴を認めたその理由がないからです。「ローマ皇帝様、このパウロという男は無罪と分かっているのですが、どうかよく調べて裁判をして下さい」は通用しないのです。「無罪と分かっているならなぜ釈放しないのか」となるわけです。ですから、フェストゥスは何らか罪をパウロに見出さないと皇帝のもとに送るのには非常に都合が悪いのです。フェストゥスは非常に困っていました。**

**そこにユダヤ人であるアグリッパ王とその妹であるベルニケがフェストゥスの総督着任祝いのため表敬訪問をしたのです。このアグリッパ王はイエス様の時代のヘロデ大王のひ孫であり、前の総督フェリスクの妻のドルシラの兄にあたります。そしてアグリッパ王はローマ帝国からユダヤ地方を治めることを認めてもらっていましたので、身分としては総督フェストゥスの方がアグリッパ王よりも上になります。そのアグリッパ王とベルニケがフェストゥスのもとに訪問に来た、これはパウロの事で困っていたフェストゥスにとって千載一遇のチャンスです。ユダヤ人の事はユダヤ人に聞けとばかりにパウロの件をアグリッパに持ち出して今までの経緯を説明します。**

**19～20節でフェストゥスはこう語ります。**

**「パウロと言い争っている問題は、彼ら自身の宗教に関することと、死んでしまったイエスとかいう者のことです。このイエスが生きていると、パウロは主張しているのです。**

 **わたしは、これらのことの調査の方法が分からなかったので、」**

**これはユダヤ人の宗教の問題であり、しかもパウロはあの死んだイエスが生きていると主張している。こうなるとローマ人の私にはわからないとはっきり述べるのです。この言葉の裏には「ユダヤ人であるアグリッパあなたならわかるでしょう」という思いがあるのです。フェストゥスの説明を一通り聞いたアグリッパは「わたしも、その男の言うことを聞いてみたいと思います」と興味を示しました。アグリッパにとってもパウロの話を聞くチャンスが来たのです。フェストゥスにとっては思うつぼです。これでアグリッパの助けを得てパウロに何かしらの罪をつけて皇帝に罪状と共に送ることができると考えたのです。**

**そうして翌日、アグリッパとベルニケは華やかに着飾ってやって来ました。千人隊長たちや町の主だった人々も謁見室に入りました。まるでサーカスの見世物でも見るかのように町中賑やかに沸き立っていたのでしょう。そうして囚人パウロが鎖につながれて連れてこられたのです。**

**「アグリッパ王、ならびに列席の諸君、この男を御覧なさい。ユダヤ人がこぞってもう生かしておくべきではないと叫び、エルサレムでもこの地でもわたしに訴え出ているのは、この男のことです。」（24節）裁判という名のショーの始まりです。しかし、この裁判は決して公平な裁判でないことは明らかです。イエス様の十字架という結論ありきで進められる裁判と同じような感じです。この裁判はパウロにとって罪に陥れられるピンチでしょうか。**

**イエス様はダマスコ途上でパウロに出会い彼をイエス様を信じる信仰へと導かれ、伝道者へと召された時にこのようにおっしゃっていました。使徒9：15です。**

 **「すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。」「あの者」とはパウロの事、異邦人や王たち、またイスラエルの子らがこの裁判の場に集まっているフェストゥスやアグリッパ王や千人隊長たちや町の主だった人々と考えると、今まさにイエス様がおっしゃったことが実現していると考えられるのです。それは「わたしの名を伝えるため」に、イエス様の名を伝える、すなわち福音伝道のチャンスが今到来したのです。パウロにとってはまたもや裁判、しかもパウロにとって不利な裁判であり、ピンチと思われる場面ですが、これはイエス様がおっしゃられた伝道のチャンスが来たのです。フェストゥスにとってパウロに罪をつけるチャンスであり、アグリッパ王にとってパウロの話を聞くチャンスであり、そして何よりもパウロにとって伝道のチャンスが到来したのです。「わたしの名を伝えるため」イエス様の名前を伝えるためです。**

**先ほどの25：19でフェストゥスはアグリッパ王に「これはユダヤ人の宗教の問題であり、死んだイエスを生きているとパウロが主張している」と言いました。ここの19節は「パウロが生きていると断言していたところの死んでしまったイエス」と直訳ではもっと軽蔑したような言い方です。「死んでしまっているイエス」これがユダヤ人の常識でありローマ人の常識です。もっと言えばイエス様を信じない人たちの常識です。「イエスは死んだんだ。そんな死人のイエスをパウロは生きていると言い張る」なんともバカげている。ユダヤ人のアグリッパなら私たち以上にこの発言がバカげているとわかるでしょ。そんな感じの言葉ですが、フェストゥスはパウロの裁判の本質を見抜いていると言えるかもしれません。**

**イエスは死んでいるのか生きているのか。これがキリスト教信仰の神髄なのです。「イエス様は確かに死んだ。しかし復活されて今も生きておられる。イエス様は生きている」このことを伝えるのが伝道なのです。**

**かつて2000年前にイエスというお方がいて、十字架にかかって死んで復活された、そんなお方がかつていたんだよと歴史の教科書に載るような過去の偉人のことを伝えるのではありません。私たちの罪の贖いのために十字架につけられて死んで、死から復活されたイエス様は今も生きておられる。生きて私たちと共に歩んで下さっている。それをペンテコステの時に誕生した教会でペトロを始め使徒たちが語り、パウロが語り、教会が2000年にわたって語り続けていることです。「イエス様は今も生きている」。「キリストは生きている」伝道とは今もイエス様が生きておられることを伝えることなのです。**

**私は今からちょうど30年前の1995年のイースターに日本基督教団名張教会で洗礼へと導かれました。改めて洗礼へと導いて下さり、ここまでの歩みを守り導いて下さった神様に感謝しています。1995年は1月に阪神淡路大震災がありました。3月にはオウム真理教による地下鉄サリン事件がありました。当時は社会全体が何か重い空気に包まれていたように思います。また、宗教全体に冷たい目が向けられていたように思います。私の中学時代からの友人に久しぶりに会って、私が教会に通っていて洗礼を受けたことを話すとその友人からは「怖い」と言われ二度と会ってくれなくなりました。**

**そんな、私自身も何かもやもやした気持ちで信仰生活を送っていた中で、たしかその年の11月か12月かのころだったと思うのですが、ゴスペルシンガーであるレーナ・マリアさんによる震災復興支援コンサートが神戸で行われることを知ってコンサートに行きました。レーナ・マリアさんのことはご存じの方もおられると思いますが、生まれつき両腕が無く、左足が右足の半分の長さしかない障害を持ちながらも明るく元気に神様を賛美をされるゴスペルシンガーです。私は名張教会の青年の集まりで彼女のことを教えてもらってその活き活きと神様を賛美されている姿を実際に見てみたいと思っていました。そうしたところ神戸でコンサートがあるというので行ったのです。**

**実際に見るレーナ・マリアさんはそれまで映像で知っている以上に活き活きとされて生かされている喜びにあふれていました。多くの心揺さぶられる賛美をされた中で私が一番印象に残っている曲があります。それが「主は今生きておられる」という曲です。**

**主イエスはわがため十字架にかけられ
わが罪あがない墓より蘇られた**

**主は今 生きておられる わがうちにおられる
すべては主の御手にあり 明日も生きよう 主がおられる**

**という歌詞の歌です。非常に単純な歌詞とメロディですがレーナ・マリアさんが全身全霊を使ってイエス様は今も生きておられる。今も生きて私たちの内におられる。私たちと共におられるんだ。だから明日も生きて行こう、震災という困難に決してあきらめるのではなく生きておられるイエス様と共に明日も生きよう、生きて行こう、前を向いて生きて行こう。もうちょっと頑張って生きて行こう。そのメッセージが非常に心に響きました。コンサートに来ていた多くの方が私と同じように心を打たれて生きる希望を与えられたと思います。そして私もキリスト者として歩んでいく大切なことを教えられました。イエス様は生きておられる。私の罪ために十字架にかかって死んでくださったイエス様は復活されて今も生きておられる私と共にいてくださっている、そのことを言葉はもちろんですが体全体を使って、もっと言えば私という存在そのものを通して喜びを持って希望を持って伝えていくことの大切さを教えられました。**

**「イエス様は生きておられる」世間の人は、クリスチャンはそんなばかげたことを信じ**

**ているのかと嘲笑うでしょう。フェストゥスのように「死んでしまっているイエスを生きていると主張するなんて」愚かなことだと思われるでしょう。第2次伝道旅行でパウロがアテネを訪れて、イエス様の十字架と復活の福音を語った時に、聞いていたアテネの人たちが死者の復活の話になると「その話はいずれ聞かせてもらうよ」と聞く耳を持たなかったように、死んだ者が生き返って今も生きている、そんな話は聞いてもらえないでしょう。**

**レーナ・マリアさんはコンサートに来てくれている多くの人がクリスチャンでないことは十分わかっていたでしょう。でも、だからといって聞かない人には歌わない、信じない人には歌わないのではありません。もちろん歌うことが彼女の仕事ではありますが、心の底から「イエス様は今も生きておられる」だから私は今日も明日も生きることができるんだ、神様に愛されて生かされているんだ、その喜びを歌わずにはいられないのです。その思いというものは必ず伝わっていくのです。**

**「イエス様は今も生きておられる」私たちの罪の贖いのための十字架の死から甦られたイエス様は今も生きておられ私と共に歩んで下さっている。だからこそ、私たちは今こうして前を向いて生きることができる。ここに私たちの喜びがあるのです。教会が2000年にわたって大切に宣べ伝えて来た喜びの福音を宣べ伝えていきましょう。伝道のチャンスはいくらでもあるのです。**